

その手紙は思わぬ一文で始まっていた。

拝啓 ブリード様

お手紙と『大きな火なわじゅう』の本をありがとうございます。ございました。それは大変な驚きでした。なぜなら、私は貴方が私を覚えていると思っていませんでした。私たちが会ったのはたった三回です。もちろん、貴方は私に葉書をくれました。けれども、他の人もみんなもらいました。そして私の葉書は兄が貰いました（あの時彼は列車に乗る人の手伝いをしていました、だから受け取れませんでしたが、彼は今でも残念です）。貴方は兄にも私にも本と手紙をくれました。それは大きな喜びと慰めでした。私は英語の文をたくさん書く必要がありますから、貴方に手紙を書くことは、私にとって非常に良いことです。そして本はとても大切です。一字一字注意深く読んでいます。本当にありがとうございます。

「……？」
まだ暗いというほどでも無かったが、ベッド脇の灯り

の紐をまさぐった。宮に置いたままの数本のジンの瓶がドミノ倒しに倒れ、ごとんと重い音が頭に響く。片目をつぶったまましばらく呻き、小さく悪態を吐き捨てて探り当てた紐を引く。柔らかな光が、昼を引き延ばす。もう一度寝転がってよく見たが、やはり冒頭には「ディアミス・ブリード」と書かれている。

「……」

手を伸ばし、封筒の方を手を取った。正しくこのアパートの住所とアルフレッドの名が、便箋のそれと同じ生真面目な筆跡で書かれている。アルフレッドは封筒をくると裏返した。送り主の名前にやはり心当たりは無かった。それは建て付けの悪い郵便受けにこれを見つけたときから分かっていたけれども、デイビーなんてありふれた名だし、人の名前を覚えるのもともと得意じゃない。中身を見れば誰だったか分かるだろうと、気にせず封を切った。

腕を伸ばして、ベッドの向こうでつけっぱなしだったテレビをぱちんと消す。デモの様子を伝えていたらしい有名アンカーマンの顔は、口を開けたままぐにやりと歪んで消えた。

もう一度表を見る。「ミスター・アルフレッド・F・ジョンズ」。いかにも文字を書き慣れていない子供が精一

杯丁寧に書くとしたという雰囲気の、硬い文字。青いインク溜まりにも緊張が見える。便箋の方も、一点一画おろそかにしない真つ直ぐな筆跡だった。いかにもたどたどしい英語といい、子供なのだろう。英作文初級クラスで初めて書きましたというような緊張感に充ち満ちた、けれども、だからこそか、綴りの間違いもない丁寧な字。書いている姿が目には浮かぶようだった。もう一度封筒を手に取り、名前を確認した。名字の方に目をとめておやっと思う。

「ホンダ……日ジャパニーズ系か」

それは確か、日本でよくある名字だったはずだ。少し、イメージ図を修正する。目と髪を黒く、Tシャツを襟付きシャツに。日本人と言えば眼鏡だとよく言われる——が、実際大学で会った日本人留学生はよく掛けていた——が、アルフレッドにはそのイメージは無かった。ただ、眼鏡というのは勤勉や博識のイメージから連想されるものでもある。日本人というイメージにそれが重なっているのはよく分かる。この子もやはり本が好きなのかと思ひ、アルフレッドは少し目元を緩めた。子供が本を読む姿は、いや、その空間は、アルフレッドにとって好ましいものだった。

礼を失さないようにだろう、書き慣れない万年筆を握

りしめて便箋に向かう子供、そしてその傍らにはきつとミス・ブリードから貰ったという本があり、時々その子は本に目をやる。そしてまた真剣な目でゆっくりとアルファベットを書き出す。最後に名前を書き終えた後の小さなため息まで想像して、アルフレッドは便箋を折りたたんだ。何故この手紙がここにあるのか——ミス・ブリード宛の手紙が何故アルフレッド宛の封筒に入っていたのか——、入れ間違えたにしても何故この誰とも知らない少年が自分の宛名を知っているのか、分からないことばかりなのに、その少年のイメージはやけにリアルで、息づかいまで感じられそうだった。

アルフレッドは腹ばいになって、ナップサックから取り出したメモ用ノートにボールペンで絵を描いてみた。ポップイラストは得意だ。時々ペン軸で頬を掻きながら、本を読んでいる子供を簡単な線でさらさらと描く。

「どんな顔かな」

生まれ育ったこのニューヨークのアパートには、階級で言えば中の最下層または下の上澄み、そんな辺りの人々が忙しく暮らしていて、その中には複数のアジア人がいた。何人と言われてはつとカリカチュアした絵を描けるほどではないが、なんとなくエスニックグループのイメージはある。細い目、丸い目と色々考えて、結局伏

し目に近い線を書き入れた。だってこの子は本を読んで
いるところなのだ。

できあがったイラストに満足して、アルフレッドはペ
ンを宮に置いた。

宛名違いなら郵便局に戻せばいいだろうけど、宛名が
合っている以上、当人宛に送り返して事と次第を伝えな
いと意味がない。うちには切手なんて無いから、明日バ
イト帰りにでも買いに行こう。

俺は、うさうさしている。とアルフレッドは考えた。

何故かなと考えながら、もう一度封筒を手を取った。几
帳面な字で綴られた自分の名前。ああ、真っ直ぐに呼び
かけられたみたいで嬉しかったんだなと思ひ至り、小さ
く笑った。

手帳を見て明日のシフトを確認する。深夜から早朝に
かけて引かれた太いライン。

じゃあ、と思う。じゃあ、明日は酒を入れなくても大
丈夫かもしれない。

やあ、デイビー

突然驚かせたかな。俺はアルフレッド。君の、ミス
・ブリード宛の手紙は間違えて俺のところが届いた

んだ。感謝を伝える手紙だったから、届いていない
のは双方に残念なことだろうと思つて送り返すこと
にした。

それにしても、どうして俺のところへ送つたんだい？
住所だって名前だって全然違うから不思議だよ。

追伸 『大きな火なわじゅう』は俺も子供の頃に読
んで、持つてるよ。ロングセラーだね！

二週間後、またあの几帳面な字を、郵便受けの中に見
た。

「ザ・ラウンドアイリビーン、ハズガッドオーンイツ
サーイド……ん？」

がんと力を入れて蓋を押し込んだあと、取り出した郵
便物を手には、アルフレッドは首を傾げた。もしかしたら
返信が来るかも知れないと思つてはいた。意外だったの
は、

「二通……？」

葉書と封書が一通ずつ入っていたのだ。

首を傾げていると背後に人の気配がした。別の階の住
人だろう。すつと横にずれると、確か四階に住んでいる

大学生がひどく驚いたようすで足を止めた。やあと名前を呼んだがもごもごと口を動かしてさつと自分の郵便を確認して歩き去った。彼の郵便受けはスムーズなんだなと開けてみたくなつたが、こらえる。中身に興味があるわけでもないなら蓋を開けるべきではない。いや、興味があつても蓋は須くとしておくべきなのだ。

部屋に入り電気を付ける。やはり同じ字だ。そして両方とも宛名は同じ。なんだろうと、ベッドに寝転がりながら葉書を裏に返した。

拝啓 アルフレッド・F・ジョーンズ様

ご連絡をして下さいましてありがとうございます。郵便事故は予想外でした。貴方が言う通り、あの手紙は、ミス・ブリードに届かなければなりません。私は切手に余裕を持ちませんでしたが、貴方から手紙を返して貰つたちようどその日、兄がミス・ブリードに手紙を出しました。ですから、一緒に封筒に入れて送ってもらうよう頼みました。その後、兄宛の手紙への追伸において、返事も貰いました。私の感謝を彼女に伝えることができました。本当にありがとうございます。

お手数にお詫びします。そして、私の手紙を受け取ったことで貴方に迷惑がかかつていないか心配しています。

相変わらず英語が微妙だなあと思いつながら読んだ。これでは「お手数に」詫びた話とは別のこととして「迷惑」を心配しているようだ。ともあれ、あの謝辞はミス・ブリードに届けられたらしい。それは良かった。しかし、「切手に余裕がない」のに二通？

封書の方を開けると、そこには、意外なような、しかし予想通りのような一文があつた。

拝啓 ブリード様

度々すみません。私は貴方に謝らなければなりません。戴いた本を無くしてしまつたのです。兄にも、母にも怒られました。本が貴重だからですが、それだけではなく、貴方に戴いた本だからです。本は、ただの本ではなく、友愛のあかしです。私も、だからこそと悔しく、残念です。私は、いつも大切に本棚にしまっていました。場所も決めていました。